

言説の形成作用と再現の政治性の前景化

－「へそをテーマにした変奏曲」論

車眞明(忠南大学校)

1. 初めに

「へそをテーマにした変奏曲」における「へそ」言説¹は単に「戯画化のための無意味な記号の連鎖²」を表すものではない。むしろこの小説は「これまで私たちが無意識のうちに自然と受け入れてきた叙事的再現の隠れた意味を前景化³」し、「脱自然化」するものである。言説であり、かつ再現であるこの小説が「言説の形成作用、そして再現の政治性」を前景化するという点は自己反映的特性を示している。本小説は「文化的記号が、それ自体で新しい実体を創造し喚起する能動的な要因になること、すなわち新しい社会的形式、新しい行動や考え方、態度を作る要因になりうるという点⁴」を指摘している。そして読者に対し、自分と自分を構成する世界の再現が「作られた」秩序であることを意識することを求めている。これは真理、主体、対象などが永久不変に固定されたものではなく、社会文化の流れにより「構成」される「未決定性」の政治的価値を持つことを示すものでもある。本稿は、このような構成主義⁵的で新歴史主義的⁶な特性を説明するため、ミシェル・フーコーの理論を中心としてナラティブ⁷の分析を試みる。この小説のナラティブ構造を「始まり-中間-終わり-」に図式化し、詳細は本論で述べる。

¹ 言説(ディスクール)とは、あらゆる種類の言述を指す一般的用語で、その言述が形成される規則とともに特定の言述が流通したり排除される過程をすべて含む。(사라 밀스, 『현재의 역사가 미셸 푸코』, 임정규 옮김, 엘피, 2008, 124쪽.)

² 김우영, 「‘언어’와 분석 사이, ‘행위’하는 몸-이청준의 신체 모티프를 중심으로」, 『민족문학사연구』 제54집, 민족문학사학회・민족문학사연구소, 2014, 558쪽.

³ 린다 허전, 『포스트모더니즘의 이론과 전략』, 장성희 옮김, 현대미학사, 1998, 62쪽.

⁴ 마이클 라이언, 『포스트모더니즘 이후의 정치화 문화』, 나병철・이경훈 역, 갈무리, 1996.

⁵ 社会構成主義は、すべての真理、認識主体、認識対象が特定の時空間内で構成されたものであると主張する。すなわち、人間の経験が自然的過程ではなく社会的過程で構成され、生成された結果物であると主張する思考の形態といえる。そのため、構成主義者たちは言説が永久不変の存在ではなく、むしろ一時的で可変的だという信念を固持する。

⁶ 新歴史主義者にとって「歴史」とは事件の直線的な進行でも進歩的でもない。彼らは歴史を理解するということは厳密に言うとは事実の問題であるというより「解釈の問題」であるという立場を打ち出している。構成主義と同様に新歴史主義者たちも、すべての事件はその事件を生んだ文化によって形成されると同時にその文化を形成し、私たちの主体性も文化によって形成され、その文化を形成する相互依存的な関係であると主張している。(로이스 타이슨 지음, 「신역사주의」, 『비평 이론의 모든 것』, 엘피, 2012, 590-591쪽.)

⁷ ナラティブは「開始地点から終着点に動くという点で一つの叙事空間を持ち、その始まりと終わりの間には迂回、遅延と呼べる中間が含まれる。(폴 코블리, 『내러티브』, 윤혜준 역, 서울대출판문화원, 2016, 12-27쪽.) これはアリストテレスの詩学において一つのあらすじが「始まり-中間-終わり」の構成要素を持つとされたのと同じである。(아리스토텔레스, 『시학』, 뒤풍록과 달로, 김한식 역, 펄원클래식코리아, 2010, 176, 180쪽.) これに基づき本稿は「へそをテーマにした変奏曲」のナラティブを始まり(開始点)－中間－終わり(終着点)の3つの部分に分けてその内容を表に図式化した。

ナラティブ	該当章	主な内容
始まり（開始点）	1 章	ホ・ウォンの「へそ喪失」事件発生
中間	2, 3, 4, 5 章	・ 2, 3 章:へそ言説の形成過程、「現在」のへそ言説のために点検するへその歴史と真実(真) ・ 4, 5 章:へそ再現の過程、再現の政治性、ホ・ウォンが真実を語る勇氣
終わり（終着点）	6 章	ホ・ウォンの「へそ取り戻し」事件発生

2. 始まり：「へそ喪失」事件と「変奏」の意味

小説は下記の文章から始まる。ホ・ウォンの「へそ喪失」事件は、「ある日」突然、あまりにも思いがけない異変によって起きた「おかしいこと」（297）である。

ある日の朝、ホ・ウォン(許元)は突然彼のへそを失った。⁸

この、偶然にして偶発的に発生したへその喪失は、ナラティブ開始地点である「今-ここにたった一度だけ発生・出現した事件」であり、原因を説明することも法則化することもできない唯一のこととして現れる。したがって「へそ喪失」はホ・ウォンにとって「自分の固有性と特異性の実存を持つ事件」⁹として定着し始める。復元不可能な「へそ喪失」事件は、ホ・ウォンの腹にへそが存在した時とは完全に異なる認識の断絶と不連続を起こす。へそという事物の秩序が「有」から「無」に変化したということは、へそに対する認識と知識が再構成できるようになったことを意味する。さらに、「へそ喪失」事件は、「原初的経験のテーマとして、真実の形式のもとで世界を異なった形で認識できる可能性を確立」¹⁰する。へその喪失は「新しい事が乱入する『事件』により新しい真実の現実態を特徴づける」¹¹ 特異性の機制となる。例えると、この事件以後に到来した真実とは、文字通り「へそ喪失」である。この作品はへそという事物の秩序が変化するにつれ真実の問題も新たに「変奏」し再構成されることを示している。これが題名にある「変奏」の一つ目の意味である。さらに、「へそ」という物を「失う」ことは、次のような「変奏」の意味も含む。それは「へそ」の表面的な物体性が分散され、非物体化された無形の記号になるという点である。この作品でへそは、自分の物質性を失ってはじめて自分の表面からの意味作用という「効果」を放つ。すなわち、へそという物が自身の物的起源から解放され「思惟」の超越論的な表面を産み出す「変奏」¹²をしたのである。この

⁸ 이청준, 『가면의 꿈』, 열림원, 2009, 295쪽.

以降、テキスト引用はページ数のみ本文に明記するものとする。

⁹ 허경, 『미셀 푸코의 지식의 고고학 읽기』, 세창미디어, 2016, 84-87쪽.

¹⁰ 미셀 푸코, 『담론의 질서』, 허경 옮김, 세창출판사, 2020, 65쪽.

¹¹ 프레데리크 그로 외 지음, 『미셀 푸코 진실의 용기』, 심세광·박은영·김영·박규현 옮김, 도서출판 길, 2006, 29쪽.

¹² 송기섭 (송·ギソプ)はこの小説の「変奏」の意味を次のように説明した。(송기섭, 「재현의 발생과 포화된 형식: 조 휴즈, 『들뢰즈와 재현의 발생』, 박인성 역, 도서출판b, 2021」, 『이화어문논집』 제55집, 이화어문학회, 2021, 175쪽.) 「『変奏』はへその『物質性』から離れて非物的になること、すなわち発生と同じ生産の効果を指す。」本稿もまた、この見解に同意する。

「変奏」は「へそ」という記号が、作品内の真実が発生する表面であり核心空間素になることを隠喩している。へその「有から無への事物性の変奏」は、へそという空間素が意味作用の内在的空間に変貌することをいう。ホ・ウォンはへそを失ってから、へそに対する寂しさとへそを「意識」する「果てしない想念」(299)から抜け出すことができない。定所的な主体であるホ・ウォンはへそをなくした後、へその記号、すなわち「空っぽになった事物の無能力さ、また重みを通して、そこに置かれた意味を直観の中で捉え直し」し¹³始める。「へそ喪失」によって始めてへそに対する「思惟」をするようになったホ・ウォンは、へそに対する「知識と思念」に依って自分だけの「独特なへそ論」(300)を発展させていく。

3. 中間：へそ言説の形成作用と再現の政治性

「中間」部分はへそ言説の作用による「効果」を描き出している。へそ言説の形成作用の「効果」とは、権力/知識、真実、主体性、対象性などの実体が言説の中で構成されることをいう。第2章で「世の中の人々もやはり」へそに「対する関心を示し始める」。「へそ物語」(301)もまた「一般化の兆しを見せ始め」た。「公開的に」盛んに行われる「へそ物語」の形成は言説形成を意味する。雑誌、新聞、放送局、さらにはへそ知識の専門的な体系化を求める学術ジャーナル《週刊へそ》を通じてますます「広範囲に」広められる。雑誌や新聞、放送局、学術ジャーナルは一貫性のある知識体系を作り、その正当性を立証する手段である。

人々がアダム・イブ論争を通じてへその歴史の検討を試みることは、真実を問題化するためである。言説形成の作用の効果として最も重要なのは「真実」の問題であり、へそ言説もまた「自分の目の前で生まれている特定の真実の輝き」¹⁴に関連する。ある人たちは中世時代の権力/知識の主体である法王が主張する真理を画家たちも疑いなく信奉し、へそのないアダムとイブを描き出したと主張する。その時代に「へそを描くこと」は絶対に排除されるべき「タブー」の領域だったのである。しかし反対の立場を持つ者たちは「真の時代精神とは'見せて見える'ものではなく'発見して発見された'ものでなければ」(306)と主張する。中世時代を読み解く認識論的枠組みは、存在者が神によって創造されたことであつた。すなわち、その時の画家たちに「見せて見える」真理は他でもなく、神論によって胚胎された真理をいう。しかし彼らは芸術家たちが時代の与えられた磁場での認識の問題を跳び越えて真実を語る勇気を持つことが「発見」の真理であり、時代精神であることを強調する。彼らは「アダムとイブにはへそがなければならない」と考える。いつの間にか確固不動たる「へそ界の権威者」(310)になったホ・ウォンがへそ言説に積極的に乗り出し、アダム・イブに関する論争は結論を迎える。その内容は次の通りである。中世時代の画家たちはへそのある人間を描きたかったはずだが、破門を恐れて勇気が出せず「心の中に秘めた自分の真実を」「思う存分謳歌できる時を、タブーであるへそを自由に描くことができる時」を切実に待ち、「新しい時代を迎えたはず」(312)だという結論だ。「今日」の日にはアダムとイブのへそを描いた絵が見られる時代が到来しており、これは画家の「勇気」(313)によって「実現」された結果だということである。「真実を語る勇気」すなわち、「パレーシア¹⁵が必要だ」という立場に同意したホ・ウォンは「勇気論者」を自認する。

¹³ 미셸 푸코(2020), 앞의 책, 2020, 64쪽.

¹⁴ 미셸 푸코(2020), 앞의 책, 2020, 66쪽.

¹⁵ 「パレーシア」という言葉は「率直に話すこと」、「真実を語ること」、「真実の勇気」、「発言の自由」な

その後《週刊へそ》の「会いたいへそ・ベスト3」にホ・ウォンとH、Lが選ばれる。「3人は皆へそ論争で活躍した人達である。」(318)《週刊へそ》は彼らに「写真かデッサンの中から一つを選択」して紹介することを勧める。まず、Hは自分のへそを再現する手段としてデッサンと文章を選んだ。ホ・ウォンはHの「へその絵があまりにも新鮮な実感を醸し出している」(322)と感嘆する。Lは「写真で」自分のへそを「直接見せ」(324)たが、彼のへそ写真もまた「単純なままに堂々としていて、深く暗いままに実感があつた」(325)。へそ権威者たちの実感のあるへそを見て、ホ・ウォンは自分以外の世界の全ての人が本当のへそを持っているのかもしれないという失意に陥る。しかし、ホ・ウォンはすぐにLの写真が実は「へその絵を描いて貼って撮った写真」だったという事実を知ることになる。HとLは再現においてその方法を選択し、さらにへそをどのように表現するか、どの部分を隠すかを選択・排除したのである。彼らは自分のへそを「見せて、見える」ものとして人々に表した。これは彼らのデッサンと文が形成した文脈、または写真と文が形成した文脈によって、見る人々に自分たちの意図どおりの「信頼」を形成させるよう言説を作ったことに等しい。一方、へその権威者であるホ・ウォンはへそを喪失した者だという「秘密」を共有し、それを口外するという事は容易ではなく、社会的にもすでにそれは「タブー」(331)視された状況に直面している。へそを失ったという秘密を口外した瞬間、それがへそ界と社会に大きな波紋を呼び起こすことになるため、このような特定の発言は排除されなければならないためだ。へそを失ったことが「真の真実」だとしても、言説を通じて真実操作が可能であることを、この小説は指摘している。一方、Lのへそが本物であれ偽物であれホ・ウォン「自身のへそを失ったことは変わりのない事実」の問題だった。そしてホ・ウォンは「自分自身のへそ物語やそれを見せることは」「事実でなければならない」(327)とし、自分を配慮する勇気を実践しようと再び決心する。そしてホ・ウォンは自分のへそ紹介を控え、真実と偽りの間の選択の岐路に立つことになる。

4. 終わり: 真実の勇気と「へそ取り戻し」事件の意味

結局、ホ・ウォンは《週刊へそ》誌に原稿を送らずに汽車に乗る。彼が自分だけの「勇気」として選択した方法はへそ紹介をせずに「沈黙」することだった。「騒動」(332)が起こるかもしれないが、ホ・ウォンは「偽り」を本物のようにすることを拒否し、抵抗するために「沈黙」を選ぶ。この時の沈黙はある真実を他人に示す沈黙であり、パレーシア的行為であり態度と言える。なぜなら、彼が《週刊へそ》に自分のへそ紹介をせずに逃げたのは、人々を不快にさせたり怒らせたりすることになりかねず、へそがないことを疑われてばれる可能性が高くなるためだ。へその紹介を諦めることは「表象の統制による自己修練¹⁶⁾」型の「パレーシア」を実践したというわけである。一方、汽車でホ・ウォンは突然「思いがけない異変」を「発見」(333)する。

どと翻訳できる。パレーシアストは、自分の言うことが真実だと信じているから真実を言い、それが本当に真実だからそれを真実だと信じている。パレーシアストが率直だからではなく、彼は自分の意見が真実だから、真実であることを知っていることを言う。したがって、パレーシアでは信念と真実が正確に一致する。同時に、パレーシアストは危険にもかかわらず真実を語る者でもある。もちろんこの危険が常に生命の危険だとは言えない。パレーシアにとって危険は、常にパレーシアストが言明した真実が対話相手を傷つけたり怒りを触発する恐れがあるという事実起因する。(미셀 푸코, 『담론과 진실』, 오트르망 심세광·전혜리 옮김, 동녘, 2017, 12, 92-93, 96쪽.)

¹⁶⁾ 미셀 푸코(2017), 앞의 책, 12, 383쪽.

それを探そうとあれほど苦勞した時は、氣配すら見えなかったへそがまるで嘘のように、または偶然のようにふと戻ってきていた。(334)

「偶然」に発生したへその物体性獲得もまた、ナラティブ終着点である「今-ここに」たった一度だけ即時発生・出現した事件だ。へそは決してホ・ウォンの努力と意志で戻ってきたわけではない。したがって予測不可能な「へそ取り戻し」事件は、その再出現の可能性が分からないため、「外側」にある存在といえる。ホ・ウォンにへそがなかった時とは再び分離され、完全に異なる認識の断絶・不連続が起きたのである。本小説は、最初と最後にこのような「新しい事件」をそれぞれ意図的に配置することにより、永久不変に固定されるのではなく偶然のきっかけにより変奏していくへそ言説と真理の事件について指摘している。すなわち、へその「失踪」と「復旧」という歴史的状況の偶然の反復とそれに対する真理(真)ゲームは違いを生み出し、新たな実体を生成する。故に題名の「変奏曲」は、このように「断絶の線形性」という逆説をなすへその歴史と真理ゲームを象徴している。すなわち、「へそ」という事物に対する認識が断絶することで、変奏する曲線(「変奏曲」)であるへその歴史を継続して成していくことを思惟させるのである。それだけでなく、ナラティブの終着点で「なし(無)」から「あり(有)」にへそという物の秩序がまた変奏したことは、変形した真実の意志に関連する新しい形式、新しい言説が出現する余地を非決定的に残しておくものである。このような解釈は結末を「開かれた結末」と見る試みから始まる。へそが再び戻ってきてから新しいアイデンティティを獲得するホ・ウォンは、以前にへそを失った時のように、自分だけの新たなへそ論を発展させることもできるだろう。「突然戻ってきた自分のへそをそっと撫でてみよう」というホ・ウォンの最後の行為は、ナラティブの「始まり」と同じように、彼が取り戻したへそに対する終わりなき想念に浸り、新しいへそ論形成に集中するかもしれないことを暗示する。しかしナラティブはここで終了するが、本稿はこれをこの作品が開かれた結末として、開かれた可能性の余白を残したまま幕を閉じるものとする。

(翻訳責任者：宮田麻美)